

わたしのよりどころ ~私の次のステージへ~

東京都

東京櫛剣士会

小学6年 後藤珂音

剣道が、私の人生を変えようとしている。私が、剣道との向き合い方を変えようとしている。きっかけは、去年のこの研修会の作文だ。

令和3年1月27日、祖父が亡くなった。私が、剣道を続けられるよりどころとなっていたのは祖父だった。ライバルとの差を感じたときも、新型コロナウイルスで稽古ができないときも、剣道が嫌になったときも、祖父が支えてくれた。そして、剣道に大切なことは、勝つことだけではなく、人間形成なのだと教えてくれたのも祖父であった。私のよりどころは無くなってしまった。そのときは、そう思ったのです。

去年の今ごろ、私は今と同じようにこの研修会に参加するため、作文を書いていた。正直に言うと、本当はあまり気がのらなかった。作文なんて、そんなに書いたことがないし、何千字も書けるわけがない。先生や親に言われて、何のために書くのかよくわからなかったけれど、とりあえず参加することにした。

そのとき、祖父はとても重い病気とたたかっていた。祖父の家は近くだったので、毎日のように遊びに行っていたけれど、だんだん弱っていくのがわかった。「よし、そうだ。元気づけるために、祖父のことを書いてみよう。」なんだか、がんばって書ける気がしてきた。そんな気持ちになったことをよく覚えている。

運よく、一次審査を通して、みんなの前で作文を発表することになった。絶対に、完璧に暗記して、審査にのぞんでやると心に決めた。学校の休み時間、帰り道、お風呂のとき。時間があれば、いつでも発表の練習をした。本番では、思いを込めて、精一杯作文を発表できた。そして、東京都で最優秀賞をいただくことができた。そのときの祖父の嬉しそうな顔は忘れることができない。

その後、間もなく、もう一度だけ読んで披露することになった。その会場は、祖父が眠るお葬式の場だった。家族に背中を押されて最後に祖父に聞いてもらった。全国大会の結果は、残念ながら、直接伝えることはできなかった。でも、きっとあの顔で喜んでくれただろうな。

その年は、オリンピック・パラリンピック東京大会が開催された。学校の皆と観戦できることを楽しみにしていたけれど、新型コロナウイルスの影響で中止になってしまった。オリンピック・パラリンピックは、無観客での開催となってしまったのだ。選手は、とても残念だったのではないかと思う。ニュースでも、応援してくれる観客がいないために、なかなか思うような結果が出なかった選手もいると聞いた。私は、その気持ちがとてもよく分かる。やっと大会が行われるようになって、応援の声はない。そして、当然、いつもいるはずの祖父の姿はない。これまでは、たくさんの応援があることが当たり前感じていた。私が頑張れるのは、周りの人の支えがあるからなんだ。応援があることの大切さがわかった。今では、感謝の気持ちでいっぱいだ。でも、これからは、何をよりどころにしていくのかと不安だった。

私には、近くに住む二人の幼いところがある。私のことを大好きと言ってくれる。そんな二人と遊んでいるときの嬉しそうな顔に、気持ちが救われる時がある。あるときから、私の頑張りが伝わったのか、「大きくなったらかのんちゃんと剣道がしたい。」と言ってくれるようになった。共に稽古をしている弟にもさうとう刺激になっているみたいだ。もしかしたら、これからは、私が弟や幼いとこのよりどころになるべきなのではないか。バトン、きっと私に渡されたのだ。そう思うようになったら、なんだか不安が消えていった。実は、私の作文や大会の様子を見て、一緒に剣道をしないかとお声を掛けて頂いたりもしている。去年の作文をきっかけとして、色々な歯車がかみ合いだした。この奇跡のような物語が、私を人として成長させてくれている。次はどんな物語が待っているのだろう。

「中心を攻めた捨て身の面を打てるようにしなさい。」先生からそう言われる。父からも同じようなことを言われる。剣道って、色々な先生が色々な事を言うから、何が正しいのかわからなくなることもあるけれど、これは皆が言うから間違いないのだろう。先生が、上の先生に同じく言われていることもある。祖父も、テレビを観ながら、そんな面が好きだと言っていた。これが剣道の醍醐味だと言っている人もいた。そうだとしたら、私にそんな面が打てるわけがないじゃないか。でも、最近、少しわかったことがある。これを頑張ってつきつめることも「人間形成」の一つなんですよ。ね、じいじ。

剣道としても、人としても、新たなステージへ進む時が来たようだ。